

# 仙台陣屋かわら版

第八十九号  
(平成二十四年七月号)

HP: <http://www.town.shiraoi.hokkaido.jp/ka/jinya/> Mail: [jinya@town.shiraoi.jp](mailto:jinya@town.shiraoi.jp)  
〒059-0911 白老町陣屋町六八一 TEL&FAX 0144-851666 仙台藩白老元陣屋資料館発行

## 今年の特別展は、鉄道と地域との関わりに迫ります

かつて伊達紋別から倶知安間で運行されていた胆振線。廃線となってから既に二十年以上が経過していますが、実際に乗車された方も多くいらっしゃるかと思います。その歴史は大正時代にさかのぼりますが、全線が開通するまでには、二十年以上もの年月がかけられました。開通した当時の路線名【胆振縦貫鉄道】となるまで、沿線地域を含めた様々な期待が盛り込まれたことが理由です。しかし全国でも珍しい循環準急・急行列車【いぶり】を配したことで、山道で大量の鉱物等を運ぶため【D51】型の大型蒸気機関車が使用されていたことは、そうした経緯を持つ胆振線ならではの特徴でもありました。

ところで、北海道がかつて【鉄道王国】と呼ばれていたことはご存知ですか。明治政府が開拓史に託した“北海道開発”において、当初から要(かなめ)として重視したことが、鉄道網の整備でした。このために雇われたア

メリカ人技師は、開拓使長官の黒田清隆からいすれ枝分かれする鉄道の基幹的路線とするよう指示されています。実際に小樽手宮から三笠幌内までの敷設が成されると、多くの

鉄道が公・私さまざまな経営母体のもとに設置されていきました。胆振線も最初から国営だったのは倶知安〜京極の間のみで、胆振縦貫鉄道として発足した京極〜伊達紋別間は民間による働きかけの成果でした。段階的に伸ばされた各区间で、それぞれに異なる経緯を持つことも、胆振線の歴史を辿る上では興味深い要素です。そして内陸部を繋いだ路線は期待に答え、地域の振興に計り知れないほどの貢献を果たしました。胆振線を中心として、鉄道の功績、敷設を実現させた熱意や苦労などを、沿線自治体で保管されている貴重な資料から掘り起こします。

また展示会初日には恒例の講演会を催します。今回は胆振線敷設の原点である脇方鉱山のあった京極町教育委員会から、新谷保人氏にお越しいただきます。京極町ではこれま

でも郷土史啓発と発掘の一環として、地域鉄道に関する資料の収集・発表を行なっており、氏も胆振線を著した文芸作品を調査し、まとめてくれました。今回の展示会にあたっては、【文芸作品を走る胆振線】のタイトルでご講演をお願いしています。日時は七月二十一日(土)の十三時三十分から。皆様お誘いあわせのうえご来場ください。心よりお待ちしております。

## 銭函の「当地ヒーロー」誕生?

昨年度から行なっている白老町の職業体験事業に、今年も小樽銭函小学校から七名の子どもたちが陣屋資料館を選んでくれました。「面白そうだったから」と選択の理由を語ってくれたとおり、まだ習っていない範囲の歴史を熱心に聞いてくれました。どうやら鎧の試着ができることは知らされていないかったようで、ちょっと驚いたようです。しかし装着してからは「銭函の平和を守るんだ」と、終始興奮気味に楽しんでくれました。もっと歴史を勉強したくなったら、また遊びに来てくださいね。鎧もきっとピタリになっていると思います。



## くらしから見た白老の歩み

### ・親は何をしてきたか

中村齋(いつき)氏を講師に迎え、白老歴史講座を今年も開講しました。白老の古代から現代までを通覧する内容で、氏は「目先の悩みの解決に追われている私たちですが、ちょっと立ち止まって、白老に生きた先人の暮らし見つめ直してみると、もっと先を見ながら生活しなければならぬことがわかります。今年も、『親は何をしてきたか』をテーマに歴史を見つめ、我が子の幸せを果たす親のあり方を見つめるお手伝い」をするためにご協力くださっています。

これまでの講座では白老の古代からアイヌ文化期前までをクローズアップ。第一講では白老にいつ頃から人が住み始めたのか、生活のために用いられる狩猟道具の移り変わりなど、人々が気候や環境の変化に適應していった過程を解説されました。また第二講では本州からの強い影響を受けながら展開した擦文文化について、住居の形の変化や【かまど】という特徴的な設備の導入、土器の変化などを取り挙げ、その後のアイヌ文化期と呼ばれている時代へと、どのように移行していったのか、その違いを含めて説明されています。

過去から現在、そして未来へと繋がり続け

ていく私たちの生活。単に「時間」としてだけの繋がりではなく、「人と人」とが繋がっていることも意識しなければなりません。見方を少し変えるだけで、歴史の面白さは幾らでも膨らみますよ。十月には近世から現代のまでが取り上げられます。是非ご参加下さい。

## 『藤沢の文化財』

白老に陣屋を築くことを進言し、後に御備頭(おそなえがしら)として白老に赴任した仙台藩士【三好監物(みよしけんもつ)】。彼の故郷である(黄海(きのみ)が)あります藤沢町は、昨年九月に一関市と合併しました。それを記念し、四月二十八日から六月十七日まで一関市博物館にて合併記念展『藤沢の文化財』が開催されています。展示資料の中には当資料館にも複製品があります、三好家伝来の甲冑【紺糸威桶側胴具(こんいと)とおどしおけがわどくそく】が並べられていますので足を運び機会がありましたら、オリジナルをご覧になってはいかがでしょう。近々、市の指定文化財にも指定される予定です。



〈当館所蔵の複製品〉

## ラジオで全道生放送

五月十七日(木)、陣屋資料館がHBCラジオ「カーナビラジオ午後一番!」のコーナーである、「大森俊治のカーナビ中継」に出演しました。平野学芸員と大森氏の対話形式で進められ、「教科書にも載っていない歴史を扱う資料館」と紹介されました。当日は【ななかまど】も紹介されましたので、中継車を見かけた方もいらっしゃるかも知れません。中継は大森氏の他にスタッフ二名と意外に少なく、マイクは一本を交互に使っていました。大森氏自身も資料館は初めてのため、中継の一時前到来館して軽くお勉強。三十分前から質問内容の打合せをしましたが、結局どこでマイクを渡されるか本番まで解らずハラハラ。また館内での中継は非常に音が響くため、内心ではお客さんが驚かれないかとドキドキ。今は放送を機に来館者が増えるのではとワクワクしています。白老まで中継にお越くださり、ありがとうございます。ごさいました。



〈カメラを前にポーズ。中継お疲れさまです〉

## 「仙台陣屋かわら版 第八十九号(平成二十四年七月号)」

発行日:平成二十四年六月二十二日(金)

発行所: 仙台藩白老元陣屋資料館 担当者: 平野 干場